治療教育学研究　第25輯　2005年3月　69－77

自閉的な子どもへの早期の発達支援に関する研究

柴田　和美*　　森﨑　博志*

Ⅰ．問題および目的

自閉症に関する学説はこれまで何度となく変転してきたが，現在では自閉症は脳障害に基づく発達障害とみなされ，広汎性発達障害の１つのタイプとして位置付けられている。滝川（2004）は，自閉症の本質的な特徴は「自閉的孤立」であり，精神機能の獲得（発達）には，その精神機能を既に獲得した大人との十分な関わりが不可欠であると述べている。また，杉山（2001）は，自閉症児に対してはより早期からの社会的スキルトレーニングが必要であるとする一方，これらの子どもたちへの関わりにおいては，なるべく侵襲的にならないよう細心の配慮を払わなくてはならないと指摘しており，その相反する双方のテーマを実現していくことが自閉症児療育の課題であると考えられる。

動作法は，現在，様々な発達障害児に適用されており，自閉的な子どもに対してもかなり実践が行われている。動作法では，自閉的な子どもを対象とする場合，まず子どもをゆったりと受け入れながら，直接身体を介してやりとりを行い，その上で対人的な認知や行動の自己調整力等を育むことをねらいとしている。そういった点で，杉山（2001）が指摘するこれら相反する２つのテーマを実現する特徴的な発達援助法の１つとも言うことができる。

自閉的な子どもは，他者の存在を認識する力が希薄で，他者と注意を共有することが難しいという問題がその中核にある。したがって，このような子どもたちに対して物を介して関わるのでは，なかなか注意を共有していくことは難しい。動作法においては，子どもと援助者が直接身体を介しやりとりをするため，これらの子どもと援助者との共同注意を成立させるのに有効な状況を整えやすい。身体を直接介し援助者とやりとりすることで，他者の存在を自分との関係の中で体感し，他者と関わる実感（他者認知）を育むことができるのである。そして，このことが，言語発達等を含めた，その後の発達の基盤となっているものと考えられる（森﨑，2002）。また，森﨑（2002，2004）は，動作法を通した（遊びを介した場合も含め）自閉的な子どもへの関わりにおける治療的なねらいを，①「ゆったり落ち着く感じの体験」，②「行動の自己調整」，③「他者と注意を共有（視線共有から３項関係での共同注意）し，他者の存在を（自分との関わりの中で）実感する力（他者認知）を育むこと」の３つに整理しており，このことにより，自閉的な子どもの社会的な行動様式の変容が可能となると述べている。

また，一般に発達障害のある子どもたちは，他者とうまくやりとりしながら遊ぶことが難しく１人遊びになったり，遊具が使いこなせなかったり，遊び仲間にうまく入れなかったり，ルール通りにできなかったり，パニックを起こしやすかったりということが少なくない。このため，一般の子どもたちが進んでゆく道を子ども自身の力で辿っていくことは難しい。その発達が極めて遅く，つまずいたり足踏みしたりしがちで，そこに援助者としての大人の手助けが必要になる。

この点に関して，滝川（2002）は，‘自閉症の遊戯療法では，「セラピストがリードし」という面が深く求められると述べている。発達障害のうちでもとりわけ自閉症児は，まわりの人と能動的に関わりを持ち，人との関係をより深く，より広く伸ばしていく所に大きな遅れ（力不足）を持つ。しかも，人との関わりの遅れは，単にその遅れだけにとどまらず，人との関わりの積み重ねを通してはじめて発達可能な，その他のこころの働きにおいても遅れを招いてしまう。このため，重い自閉症や能動的な働きかけを受けない自閉症では，

＊　愛知教育大学障害児教育講座

広汎な精神諸機能に及ぶ発達の遅れが現れることとなる。それを少しでも防ぐために，人との交流を伸ばすような働きかけができるだけ早期からなされるべきだと考えられる（滝川，2002）。加えて滝川は，自閉症児に関わる援助者は，不安や脅威をあたえないよう，自閉症児のこころの中でどんな体験が起きているか推測しながら，少しでも場面や体験の共有ができるよう試み，少しずつ相互性をはらんだパターンへとリードしてゆくことが大切と述べている。

筆者は，動作法と遊びを手段としながら就学前の自閉的な子どもの発達支援に関わっている。自閉症児と接すると，子どもの１人遊びになったり，働きかけても反応が少なかったりして関わりが続きにくい。これは，自閉症児が他者と注意を共有したり，他者をこころある存在として，また関わり得る対象として実感したりすることに困難があり，他者とうまく関わることが難しいからだと考えられる。

自閉症児がしだいに他者と注意を共有し，こころある存在として他者との繋がりを認識していくプロセスは，生まれたばかりの乳児が少しずつ辿っていく発達的な経過とも重なる所も少なくない。大神（2002）は，乳幼児期における共同注意行動の発達的変化の経過について，税田（2003）は，乳幼児期の運動能力の発達とコミュニケーション発達の関連性について，乳幼児の発達経過を追った膨大なデータをもとに報告している。森崎（2002，2004）は，これらのデータを踏まえながら，自閉症児を対象として発達支援に取り組んでおり，筆者自身も，自閉症児への発達支援を行う際には，森崎が示すコミュニケーション発達を意識しながら，動作法と遊びを介して関わっている。つまり，アイコンタクトなどの注意（視線行動）の共有，それを基盤に他者認知を育み，自己―他者関係の成立，さらにそれを基盤として，模倣行動や指差し理解，提示・手渡し，指差し産出という３項関係としての共同注意行動，さらに表象の成立，という発達的な流れを常に意識しながらコミュニケーション行動の発達を促すことをねらいとするのである。

本研究では，動作法と遊びを組み合わせた発達支援により，自閉症児のコミュニケーション発達を特に意識して取り組んだ事例を紹介する。その上で，対象児の遊びの変化や日常的な行動の変容について考察するとともに，視線行動や３項関係としての共同注意行動の形成を中心とした，自閉症児のコミュニケーション発達を促すことを前提とした，援助者の関わりの在り方について考察する。その上で，子どもの発達レベルに応じた身体や物を介しての幅広い関わりとコミュニケーション発達の関連性について検討したい。

Ⅱ．方法

１．研究方法　事例研究

a）対象児：自閉症男児Ｓ　当時３歳２ヶ月

b）担当期間：200X年12月～200X＋２年１月

c）資料　各セッションの記録をもとに，対象児の遊びや援助者との関わりにどのような変容が見られたか，コミュニケーション行動の発達に焦点を当て考察する。

２．プログラム

a）１セッション：週１回60分間（10分間母親面接，15分間動作法，35分間遊び）。

b）セッション内容：

〈動作法（15分）〉

・ねらい；落ち着き，自己調整，他者認知形成。

・手続き（動作課題）；

「腕上げ（子どもが仰臥位になり，援助者に合わせて一緒に腕を動かす課題）」，

「躯幹ひねり（子どもが側臥位になり，体幹を大きくねじるように上体を弛めていく課題）」，

「背そらせ（子どもが上体を反らせながら，援助者に身を任せていく課題）」。

いずれの課題もただ身体を動かすのではなく，援助者の動きに合わせて，子ども自身もやりとりする感じが出るように行っていく。

また，動作法については，家庭でも毎日15分程度の母子訓練を行ってもらった。

〈遊び（35分）〉

トランポリン（他者認知の形成を意識）

キャッチボール（３項関係の形成を意識）

プラレール（３項関係の形成を意識）

ままごと（表象能力の形成を意識）

また，動作法，遊びを介した課題全体を通して，子どもと身体を直接介して触れ合うこと自体に対人認知を育む重要な要因があると考えられる。そういった点を意識し，課題を通して自己－他者の関係を育むことを重視している。

3．事例紹介

a）家族構成；父，母，兄（7歳），本人

b）診断；自閉症

c）主訴；少しでも人とやりとりができるように。危ないことをするので行動の調整がもう少しできるように。

d）生育歴・相談歴

・2：7　N病院で「自閉症」と診断。

・3：2　愛知教育大学治療教育センター

・3：5　安城市T幼稚園に通園。

インテーク時他の相談機関には行っていない。

e）インテーク時の様子

目線はほとんど合わないが，Th（援助者）の働きかけに答えて万歳をしたり，片手で腕上げをしたりする。〈ちょうだい〉と言うと黒板消しを手渡すことができる。トランポリンで楽しむ感じはなくただ揺られている。ままごとではThが指差したものをつかむ。全体的に落着きがなく，忙しく動き回っている。

家庭では，Mo（母）の指示にはある程度従うことができており，日常生活に大きく支障があるという状況ではなかった。しかし，Moが目を放している間に，高いところに登ったり，急に走り出そうとしたりする等，やや多動的な面があり，行動の調整にはやや心配な面があった。また，兄と遊んだり，他の人と関わったりすることは難しい状態であった。

Ⅲ．経過及び考察

1．全体的な行動の変容について

第1期から第4期の約1年間の関わりを通して，Cl（子ども）の行動には様々な変化が見られた。特に大きな変化としては，第2期に要求の指差しの産出が見られるようになったこと，第3期にままごと遊びにおいて表象遊びが頻繁に現れるようになったこと，第4期に「ちょうだい」，「あけて」，「きて」等の自発的な要求語と，オウム返しではあるが2語文が言えるようになったこと等が挙げられる。しかしそれだけでなく，注意が散漫でThと目を合わせず1人遊びの多かったClが，第1期から第4期へと関わりを進めてくると，様々な場面でThと目を合わせたり注意を共有したりしながら楽しく遊べるようになった。それぞれの遊びにおいてThとのやりとりが増加し，それに伴い言葉の数や種類も増えていった。

第1期（#1～#5）「自他未分化」の状態。目がほとんど合わず，動作課題においても遊びにおいても，他者であるThをほとんど意識できていない時期。

〈Thのねらいと関わり方〉

物よりも身体を介したやりとりを重視して「自己－他者」の関係を育んでいくことが重要であると考え，Clと身体を介した関わりの中で，できるだけ目を合わせられる（アイコンタクト）場面を増やすことを当面のねらいとした。また，注意がそれがちになるので，指差しを多用したり，言葉をはっきり言ったりして，Thの要求や提案を示すようにした。

〈Clの様子と変化〉

動作課題全般において目が合わず，目線をそらそうとする。動きも他動的でCl自身が動かす感じは全くない状態であった。しかし，嫌がる感じではなく，Thの働きかけに何とか応じている。また，動作法の課題以外で身体を介した関わり合いはほとんどない。腕上げでは，#4に〈バンザイ〉と両手を上げるのを喜び，短い時間だが初めて一瞬アイコンタクトが取れた。#5 Thの手を見てClが手を伸ばしてくる。躯幹ひねりでは，#4，#5で〈さんはい〉の合図で身体を弛め，〈反対側〉と身体に触れると自分でも動かす感じがある。背反らせでは，#2股に力が入り，前屈ができない。#4抵抗もあるがのんびりもたれる。

遊びでは，#3カーテンでの〈いないいないばぁ〉を喜び，Clも「ばあ」と言った。目もよく合い何度も繰り返した。トランポリンに興味を示さず，すぐ降りようとする。まだ1人では跳ぶことができない。#2，#3にThの合図でThと一緒に跳び始めるが他動的。#4向き合って跳ぶのを嫌がり，後ろ向きでないと跳べない。ボールやプラレールに興味を示すものの，ほとんど1人遊び。しかし，Clの間近で〈投げて〉とはっきり要求するとボールを返す様子も少し見られた。プラレールでは，#5 Thが坂になっている線路に電車を走らせて見せた後，〈やって〉とClに電車を渡すと真似して走らせることもあった。ままごとにはほとんど興味を示さない。遊び始めても1人遊びで，Thの働きかけへの反応は少ない。Thの言うことが全く通じない事も多く，1人で遊ぶ感じが強い。

この時期は，全体を通して，言葉の表出も少ない。独り言はよく言っているが，何と言っている

のかほとんど聞き取れない。Thの言葉を時々真似て「ばぁ」とか「あぶない」「くるくる」等言う。
→全体的には，注意が散漫でなかなか目が合わず，指示が通りにくい。1人遊びの時間が長くなりがちで，トランポリンやキャッチボールにもほとんど興味を示さず，Thと物を介して遊ぶことが難しい。滑る，回る，揺れる等の身体を使った遊びでは笑顔を見せ，Thと関わって遊べる。この時期，ClがThを意識し注意を向ける力は弱いものの，Clの喜ぶ体遊びを多く取り入れ，指差しを多用する等の工夫によって，ClがThに注意を向けやすい状況を作ることができていたと考えられる。

第2期（#6～#13） 要求を他者に伝える，Thのやることに興味を示す等の行動が現れ，少しずつ自分や他者を意識し始めた時期。

〈Thのねらいと関わり方〉

第2期も，身体を介した関わりの中でアイコンタクトが取れる場面を増やすことをねらいつつ，Clの変化を踏まえ，〈どっち？〉，〈これ？〉と要求の指差しが出るように声をかけたり，Thを真似てもらえるよう，〈ここ押して〉と指差してやり方を教えたりこちらの意図をはっきり伝えたりする工夫をした。また，言葉が増えるように，Clが繰り返しやすい場面に合った短い言葉で話しかけるようにした。

〈Clの様子と変化〉

動作法の課題全体を通して目が少しずつ合うようになってきた。Thの働きかけに合わせて，Clも動かそうとする様子が窺えるようになり，Clの自発的な動きも少し出てきた。また，動作法の課題以外の関わりでは「いないないばぁ」を楽しむようになる。腕上げでは，#7，#8でThの目をよく見る。方向を伝えるとThの動きに合わせて動かす感じが出た。#9 短い時間だが手を持たなくてもThの動きについてくる。#13楽しく繰り返しやることができた。躯幹ひねりでは，#8目をよく見るようになった。#10手を伸ばしてきてThの顔に触って遊ぶ。#11，#12ハイテンションだが，躯幹ひねりをやると落ち着く。背そらせでは，#6，#7身体を戻したがるが〈もう少し〉と伝えると身を任せる。#8，#9楽しく上体を反らし，伸びた時に目が合う。#13おとなしく，Thの合図に合わせて上体を任せる。

遊びでは，#6～#8で〈いないないばぁ〉をして遊び，#8には〈どこ，どこ？〉という言葉に反応して笑って，自分でも「いないないばぁ」とやって楽しむ。まだ，1人ではジャンプすることができない。トランポリンに全く興味を示さなかったが，跳ぶのを少しずつ楽しむようになる。#7自分から乗りたがり，跳ぶと笑顔を見せる。#8よく目が合う印象。#9 Thの差し出した手を握った。ボール遊びにはほとんど興味を示さず，プラレール遊びに夢中になっていた。ボール遊びにはThから誘うが，受け取ることはあってもほとんど興味を示さない。プラレールでは，Thが教えるとその通りに真似することが増え，指差しの理解，指差しの産出が見られるようになった。プラレールで，#6に電車の箱を初めて指差し，出して欲しいと要求（要求の指差し産出）。また，初めてジュースを飲む振りをする（表象遊びの出現）。#7〈どっちがいい？〉で「こっち」と指差して電車を選ぶ。〈ちょうだい？〉と聞くとちょうだいの身振り。#11，#12Thが教えると電車を線路の端と端から走らせ，足をトンネルにして電車を潜らせあう。ままごと遊びにも少しずつ興味を持ち始め，表象遊びが出始めた。#6ジュースを飲むふり。#11包丁と野菜を渡して〈切って〉で切る。#14ジュースを持っていると身振りでちょうだいと要求する。

言語面では，オウム返しであるが，少しずつ言葉の表出が増えてきた。Thの質問に対して「こっち」，「これ」等，少しずつ応答の言葉が出る。#11には〈だっこ？〉，「だっこ」と要求語のオウム返しが初出した。ただ，全体としてはオウム返しでも要求の言葉はほとんど出ず，音声を伴わない身振りでちょうだい，手を伸ばしてだっこ等を表すことが多い。Clが見ているものに言葉を添えた時や，身体を介して遊んでいる時によくThの言葉を繰り返した。〈どっちがいい？〉，「こっち」。〈だっこ？〉，「だっこ」。また，高い所から落ちて「いたーい」と言う等，場面にあった言葉も出る。
→全体的に，少しずつ目が合うようになってきた。指差しによく反応したり，指差して要求するようになった。やり方を見せて教えると，真似することが増えた。Thの働きかけがClに受け入れられたことで，ClからThに要求を伝える場面，指示が通って関わって遊べると感じる場面が増え，オウム返しでの言葉も徐々に増えていった。体遊び

だけでなく，物を介した遊びにおいてもコミュニケーションが成り立ち易くなった。

第 3 期（#14～#23） Thを意識して遊ぶようになり，Moへの甘えが見られる等，「自己－他者の関係」ができ始めた時期。

〈Thのねらいと関わり方〉

さらに強く関わって遊ぶ感じを出せるよう，トランポリンでClに「せーの」と掛け声を言ってもらうようにしたり，ClがThにボールを投げられるよう動作や掛け声を大きくしたりした。また，Clが何か要求する仕草を見せたら，〈なに？〉，〈どうするの？〉と声をかけ，言えない時には〈あけて？〉，〈ちょうだい？〉と聞く等，できるだけClが要求語を使う機会を作るようにした。

〈Clの様子と変化〉

動作課題全般において，長い時間は続かないものの目がしっかり合ったと感じることが増えた。じっくり課題に取り組むことができるようになり，自発的な動きが増えた。動作課題以外に，毎回体遊びを楽しむ。腕挙げで，#14目がしっかり合う。#16〈バンザーイ〉でClが自分で手を挙げる。#17，#18Thにぴったり合わせて身体を動かす感じやClが自分で動かす感じが出る。#19ゆっくりした動きでもできる。#20Thの手の動きを見る。躯幹ひねりで，#15〈もう少し〉で，もう少し弛められる。#18何度かじっくり弛めることができ，気持ちよさそう。#19短時間だがThの目をしっかり見る。#22，#23〈ギュッギュ〉の掛け声に反応し長く目が合う。背反らせで，#14～#16〈バンザーイ〉に合わせて上体を反らす。笑顔で目もよく合い，長めに取り組める。#17～#19で自分から反らせようとする。目が合うと何かしゃべる。#20Thの働きかけに合わせて自分で背中を反らす感じがある。

遊びでは，#15，#16いないいないばぁをやってとThに近寄る。膝にのって後に倒れたり揺れたりする。#16くすぐると笑いThの目を見る。#18，#20Thに支えられ柱を登る。グルグル身体を回すと楽しそう。#19足を〈ビョーン〉と投げ出して遊ぶとよくThの目を見る。#21，#22足でThをキック，身体でのひこうき遊びやギッコンバッコンを楽しむ。1人でもトランポリンを跳ぶことができるようになる。トランポリンが好きになり，Clが跳び始めの掛け声も付け始める。#14〈せーの〉を聞いて「せーの」。Thがタイミングを合わせらせるようにリードし，何度も飛ぶ。#16初めて1人で跳べる。Thが跳ぶのをやめると誘ってくる。#20Thの言葉を繰り返し「ジャンプ」，「ピョンピョン」。〈もう1回？〉，「もう1回」。ボール遊びに興味を持ち始め，Thの投げたボールはすんなり受け取るようになる。プラレールでは要求語が出てきた。ボール遊びで，#16ボールをよく見て受け取る。#17足に投げるとキックする。#18～#23では数回Thの〈投げて〉で投げてくれる。プラレールで，#22〈出して？〉ときくと「出して」。〈籠持って〉と指差すと持つ。#23〈線路直して〉と指差すと直す。表象遊びも増えてきた。物を食べ物に見立てて食べる真似をし，人形にも食べさせるようになる。#14〈ケーキちょうだい〉で丸太をくれる。#17丸太をケーキに見立てて食べる真似。#18～21〈ちょうだい〉というと，人形にご飯を食べさせる。Thの真似をして「いただきます」，「おいしい」，「もぐもぐ」。

頻繁にThが言う言葉を真似したり，遊びながらその玩具の名前を言うようになる。オウム返しであるが，要求語を言葉で言うようになる。#14トランポリンで「せーの」と掛け声。#16初めて〈これなに？〉に「アンパン」。身振りではなく，〈あけて？〉，「あけて」。〈来て？〉，「来て」。〈ちょうだい？〉，「ちょうだい」。#19〈どうするの？〉で「ちょうだい」と自発的な要求語が初出した。→第1，2期のような目の合わせ方とは違い，短時間だがThの目をしっかり見てくる。動作課題にじっくり取り組むことができるようになり，Clの自発的な動きが増えた。動作課題以外にも，毎回体遊びを楽しむようになる。ThがClの注意を引きつけ，要求の言葉を使えるように働きかけてきたことから，トランポリンやキャッチボールでは他者をだいぶ意識して遊ぶことができるようになり，指差しだけでなく言葉によって要求を伝える力も身につけ始めた。Moからは「Clが甘えてくるようになった。保育参観ではMoを探す様子も見られて嬉しい。」と報告があった。

第 4 期（#24～#32）Thの様子を窺って遊ぶようになり，自発的に他者のやることを真似るようになる等，Clの中に「自己－他者の関係」がかなり成立してきた時期。

〈Thのねらいと関わり方〉

〈どうするの？〉と質問した後にはClの答えをしばらく待ち，自発的な要求語を引き出すように

した。1語文が出るようになったので，Clの言葉に足りない所を付け加えるように，2語文で話しかけることも意識していた。ClにThの様子も気にして遊んでもらえるよう，トランポリンでは，「せーの」のタイミングが合わないと〈もう1回〉と伝え，タイミングよく掛け声をかけるよう促した。さらに，Thの遊び方をさりげなく見せたり，〈○○しよう〉と適切に提案したりすることで，遊びが発展するよう心がけた。

〈Clの様子と変化〉

動作法の課題全体を通してきっちり形をとることは嫌がるが，楽しくやりとりする中でThの目をジーッと見るようになる。他動的でなく，Thの働きかけに応じてClが動きを調整する。動作課題以外での体遊びも増え，ClがThの様子を窺うため一緒に遊ぶ感じが強く出るようになった。腕挙げで，#28～#30腕を動かすと目が合いやりとりできる。#32手を持たずにThの動きに合わせ，Thの目と手を交互に見る。躯幹ひねりで，#24繰り返しやるとThの働きかけで弛める感じが出る。#28，#29〈キュッキュ〉と遊びながらやると笑顔でThの目を見てやる。背反らせで，#24足を崩さない程度にしっかりブロックしてもゆっくり反らせられる。#27〈座って〉で座り，〈のびのびー〉と声をかけてやると楽しそうに反らす。#30Thのタイミングに合わせて上体を反らし目を合わせ，長めにできる。

遊びでは，#25，#26，#28足を投げ出して遊び，〈キック〉と言って遊ぶと笑顔。目をよく見る。#27，身体をごろごろ回転させすぐると顔を見てニコニコ。#30Thの両手を握ってくるっと一回転。〈ジャンプ〉で抱き上げると，タイミングを合わせて床を蹴り，何度もジャンプする。後ろに倒れる遊びでは，Thとタイミングを合わせて「ビョーン」。第3期までは，「せーの」の掛け声が一方的だったが，#25ではThをジーッと見てから掛け声をかけ，#28では言い直す等，Thの様子を窺って「せーの」と言えるようになる。また，#29初めてThの目を見るように，ジャンプしながら自分で上を見上げてきた。ボール遊びでは，ClからThにボールを投げることが増えてきた。プラレールでは，Thがやることをよく見ていて自分から真似するようになり，Thの言葉をよく聞いて行動する。自発的な要求語もよく出るようになる。ボール遊びでは，#29テニスラケットにボールを投げる。#32Thに何度もボールを返してくる。プラレールでは，#24Thが持っている電車を見ているので〈何？〉で，「ちょうだい」。#29，#30〈○○おこう〉と声をかけると，トンネル，駅，踏み切り等を置いたり付け加えたりする。料理作り遊びをする等，ままごとらしい遊びが始まる。また，空気を物に見立てる等，表象の力も伸びてきた。#24Thを真似て箱から鍋に粉を入れて混ぜ，ケーキ作りの真似をする。#25食べる真似をして「おいしい」。#27〈まぜよう〉でお玉を持って空の鍋を混ぜる。#30〈ケーキどうぞ〉と空気を渡すと受け取り食べる真似。#32できたもの（空気）をお皿に盛る真似。

自発的な要求語（ちょうだい，あけて，行こう，来て等）が言えるようになる。名詞や擬音語だけでなく，形容詞，あいさつ言葉もいう。オウム返しで2語文も出始めた。#25〈なに？〉で，初めて自分から「あけて」。#28「来て」と自分から言う。食べる真似をして「おいしい」，「いただきまーす」。#31初めてオウム返しではあるが「電車かいて」と2語文が言えた。また，〈駅ちょうだい？〉で「駅ちょうだい」。〈アンパンマンどこ？〉等の質問に指差しで応えるようになった（応答の指差し産出）。#32〈電車かいて〉で「電車かいて，はい」。

→目をジーッと見てくるようになる。第3期とも様子が異なり，Thの様子を窺いながらCl自身が動きを調節しようとする。動作課題でも，他動的でなくThの働きかけに応じてClが動きを調整するようになる。体遊びも増え，ClがThの様子を窺うため一緒に遊ぶ感じが強く出るようになった。Thと楽しくやりとりできる場面やThのやることを自分から模倣する場面（他者の行為を理解した上での動作模倣）が増えた。ままごとでは，切る，混ぜる，焼く等してご飯を作るなど表象遊びが多くなった。簡単な要求語を自発的に発するようになった。

動作課題やトランポリン等である程度しっかりアイコンタクトが取れるようになり，自分を意識し，Thの動きや周りの状況に合わせて行動できるようになっていった。また，Thを見て，Clが自分から真似するようになったため，表象遊び等には大きな変化が見られた。さらに，Thの言葉かけに応えて自発的な要求語，2語文の表出が見られるようになった。Moからは「幼稚園でも友

達をよく真似する。みんながやっていることはClもできる。」という報告があった。

2．コミュニケーション行動の変化について

	1期(全5#)		2期(全8#)		3期(全10#		4期(全9#)	
	割合(%)	#平均(回)	割合(%)	#平均(回)	割合(%)	#平均(回)	割合(%)	#平均(回)
Aアテンションシフト	6.7	0.2	2.3	0.13	***6.9***	***0.5***	***6.4***	***0.78***
Bアイコンタクト	26.7	**0.8**	27.9	**1.5**	16.7	**1.2**	24.5	3
C指差し理解	33.3	**1**	23.3	**1.25**	20.8	**1.5**	20.9	**2.56**
D模倣(教化)	13.3	0.4	***14***	***0.75***	***16.7***	***1.2***	5.4	0.67
E提示手渡し	20	0.6	9.3	0.5	***18***	***1.3***	9.1	1.12
F指差し(要求)	0	0	***18.6***	***1***	6.9	0.5	6.4	0.78
G模倣(自発)	0	0	0	0	0	0	***2.7***	***0.33***
Hふり遊び	0	0	2.3	0.13	***13.9***	***1***	***20***	***2.44***
I指差し(応答)	0	0	2.3	0.13	0	0	***2.8***	***0.56***
合　計		3		5.38		7.2		12.2

上の表は，Clのコミュニケーション行動の変化についてまとめたものである。A～Iの項目は，乳幼児期のコミュニケーション発達の順に並べてある。各コミュニケーション行動の出現時期や各時期における頻度を見ていくことで，一般とは異なった，Cl自身のコミュニケーション行動獲得の順序や段階，また，Clのコミュニケーション行動の考察から自閉症児一般のコミュニケーション獲得についても検討することができるのではないかと考え分類した。

この表からコミュニケーション行動獲得の流れを考えてみたい。「B．アイコンタクト」や「C．指差し理解」は第1期から現れていた行動であるが，第1期から第4期にかけて，これらの行動には大きな質的変化が見られた。全4期間をかけて，相手を意識するレベルの低い状態から，相手をある程度はっきりと意識した状態での行動へ変化していったと考えられる。これらの行動は自閉症児にとって簡単に獲得できるものではなく，他者との関わりを深めることで獲得可能になるものであろう。この「アイコンタクト」や「指差し理解」行動は，他者の存在をしっかり認識していることが前提となる行動であり，その意味で，その他の行動獲得の基盤となるものと考えられる。その質的変化は，その他の行動獲得に大きな影響を与えるものと考えられる。

一方，「D．大人の教化による動作模倣」，「E．提示手渡し行動」，「F．要求の指差し産出」は，第2期や第3期に概ね行動が成立し，第4期に「G．他者の行為を理解したことによる動作模倣」や言葉による要求等の，より高いレベルでのコミュニケーション手段に移行したことが窺えた。つまり，これらの行動は「アイコンタクト」や「指差し理解」の質が少し高まることで獲得可能になるものであり，一度出現してしまえば，比較的獲得や成立も早い行動であるかもしれない。

そして，今回の事例から，自閉症児も順序としては概ね乳幼児と同じような経過でコミュニケーション行動を獲得していくことは窺えた。しかしS児は，1つの行動を獲得成立させた後，次の行動を獲得成立させるという発達ではなく，それぞれの行動獲得は不完全ながらも様々な行動を現し，徐々に質を高めていくという発達を見せた。そして，今回の事例では，発達の土台として「アイコンタクト」や「指差し理解」が存在し，これらの質的変化が他のコミュニケーション行動の出現や発達に大きく影響を与えていることが窺えた。

3．言葉の変化について

	1期(全5#)		2期(全8#)		3期(全10#		4期(全9#)	
	割合(%)	#平均(回)	割合(%)	#平均(回)	割合(%)	#平均(回)	割合(%)	#平均(回)
1独り言	**63.6**	**1.4**	17.2	0.63	13.4	0.9	21.8	2.89
2物に関する言葉	9.1	0.2	**37.9**	**1.38**	13.4	0.9	10.9	1.45
3Clに関する言葉	27.2	0.6	34.9	1.25	**41.8**	**2.8**	21.8	2.89
4誘導した要求語	0	0	3.4	0.13	**14.9**	**1**	**12.6**	**1.67**
5質問への応答	0	0	6.9	0.25	**13.4**	**0.9**	**9.2**	**1.23**
6自発的な要求語	0	0	0	0	3	0.2	**21**	**2.78**
7誘導した2語文	0	0	0	0	0	0	**2.5**	**0.34**
合　計		2.2		3.63		6.7		13.2

第1期，Clの発する言葉は，「①独り言」，「②物に関する言葉」，「③Clの動き・状態に関する言葉」に限られていた。第2期に「④誘導による要求語」，「⑤質問への応答」，第3期に「⑥自発的な要求語」，第4期に「⑦誘導による2語文」が初出し，様々な言葉を発することができるようになった。つまり，Clの場合，(1)他者を全く意識しない独り言の時期，(2)オウム返しで様々な言葉を発する時期，(3)オウム返しで要求語を言うことができ，質問に言葉で答えられるようになる時期，(4)自発的に要求語が言える時期，(5)オウム返しで2語文が言える時期が順に現れた。つまり，まず言葉をそのまま覚えて使う独り言から始まり，他者の言葉をオウム返して使っていく中でその言葉に意味を付け加え，自分の言葉にしていっている。このことからも，オウム返しでの言葉を肯定的にとらえ，Clが繰り返し易い言葉で話すよう心がけることが大切と言える。そして，その言葉が徐々にCl自身の言葉となっていくよう〈なに？〉，〈ど

うするの？〉等の質問をし，Clが自発的に言葉を発する機会，その言葉の使い方を知る機会を，Thが意識して作り出すことが大切であると考えられる。

4．発達検査にみられる変化について

	運動		社会性		言語	
	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発話	言語理解
〈1回目〉インテーク 3歳2ヶ月	2:06	2:03	1:06	0:01	1:00	1:00
〈2回目〉3期#21 3歳11ヶ月	3:04	3:04	2:09	0:06	1:06	2:03
〈3回目〉4期#32 3歳2ヶ月	3:08	3:04	3:08	0:11	2:06	2:06

「円城寺式・乳幼児分析的発達検査表」による発達検査結果に大きな変化が見られ，大きく発達したことが明らかとなった。まず，運動面「移動運動」「手の運動」の発達は，遊びの変化と大きく関係していた。「移動運動」の項目での伸びは，両足でジャンプできるようになったことである。これは，毎回のケースで少しずつジャンプをした結果，第3期に1人でもトランポリンで跳べるようになったことと関係する。そして，ジャンプの獲得は，第3，4期のトランポリン遊びの発展にも繋がり，他者認知の獲得にも大きな影響を与えたものと考えられる。

次に，社会性の発達についてであるが，自閉症児はこの社会性の発達において特に困難を示すと言われる。Clにおいても，発達の伸びが見られにくい項目であると思われたが，「基本的習慣」については26ヶ月の伸びであり，他の項目の中で最も著しい発達を見せている。具体的には，靴を1人ではく，上着を自分で脱ぐ，自分で顔を洗う等，身の回りのことは自分でできるようになった。これは第4期の，化粧台でおしゃれする遊びや，「友達がやっていることはClもやれる」との報告にも結びつき，Clの他者を模倣する力が伸びた結果であると考えられる。また，自閉症児においては最も伸びにくいと考えられる「対人関係」の発達においても，1ヶ月の発達レベルから10ヶ月の伸びを見せた。具体的には，第2回検査において，「あやされると声を出して笑う」，「ほめられると同じ動作を繰り返す」，「身振りを真似する」という変化があった。これは第3期にMoへ甘えを示すと報告があったこととも関連するものであろう。人からの働きかけに対するClの応答がよくなり，MoもClとの関わりを楽しめるようになったのではないだろうか。また，第3回検査には，「簡単な手伝いをする」，「困難なことに出会うと助けを求める」等の変化があり，日常生活においても，他者を意識した関わりが持てるようになったことが窺える。ThとClとのやりとりの深まりが，日常にも直接影響した結果であると考えられる。また，共同注意行動は一般に生後9ヶ月頃から現れるが，Clの社会性「対人関係」が10ヶ月の発達を示したことは，今後のコミュニケーション発達につながる大きな変化だと言えるのではないか。

言語面の「発語」，「言語理解」の発達は，Thとの関わりの中では，オウム返しによる2語文しか出ていないが，日常生活においては，「おふろ入る」と言う等，自発的な2語文も見られるようになってきたと報告があった。「もうひとつ」，「もうすこし」が分かる等の変化もみられ，これも，トランポリン等で〈もう1回？〉，「もう1回」という関わりを繰り返し行ってきた結果なのではないか。

Ⅳ．まとめ

筆者は全32セッションにおいて，乳幼児のコミュニケーション発達の順序や段階を頭におき，Clの現状にはどのような関わりが必要なのか，常に考えながら実践を行ってきた。そしてアイコンタクトの獲得を中心に，他者認知を深めることを意識しながら，声かけ，働きかけを工夫して能動的に関わってきた。第1期においては，Clと一緒に遊ぶ感じをつかむことが難しく，Thとしてもどう関わればよいか悩む事も多かった。しかし，Clと身体を介して遊ぶ場面，共感する場面を増やしていくことで，第2期には少しずつ物を介して遊べるようになり，Clが要求に指差しを使うようになった。第3期には，オウム返しでの要求語が出現した。第4期の現在では，ClはThに自分から要求を伝えるようになり，Thの様子を窺いながら遊ぶことができるようになっている。

このような変化の背景には，やはりThとClの様々なやりとりの深まりがあったと考えられる。第1期Thは，目を合わせる場面，指差しによって注意を共有する場面を増やすことを意識していた。そして，第2期に目が合うようになり，指差

しによる要求が出てきた。つまり，第１期のThの指差しによる働きかけが，第２期の要求の指差し産出に繋がっていたのである。Clはコミュニケーション発達における１つ１つの行動を徐々に獲得していっており，Thはその行動の少し先を行くようなコミュニケーションの方法で働きかけてきていた。発達検査やMoの話からは，この約１年のThとの関わりを通して，Clが日常生活においても大きく成長を遂げたことが明らかになった。筆者が行ってきた，発達のレベルに応じた身体や物を介しての幅広い関わりは，子どものコミュニケーション発達に大きく影響を与えるものであると言える。

自閉症児といっても，１人ひとりの状態は様々である。本事例においては，まずアイコンタクトの成立を目指し，注意を共有しやすいよう身体での関わりを重視し，次第に物での関わりに移行していった。アイコンタクトが成立している場合には，初めから物を介して関わり，動作模倣やふり遊び，指差し産出等をねらいとして進めていくことになるかもしれない。ただその場合においても，自閉症児がアイコンタクトの完全な獲得には大変困難を示すことや，他者との注意の共有を苦手とすることを考慮する必要がある。ある程度アイコンタクトが成立しているケースにおいても，Thが動作課題や体遊び，トランポリン等，他者と直接身体を介したやりとりを取り入れることで，さらに他者認知等コミュニケーションの基盤をしっかりと育むことができるのではないか。また，本事例のようにClが３～４歳と幼い場合には，自閉症児に限らず発達的に遅れがある子どもでは，注意の共有は難しい面がある。こうした幼いClの場合にも，身体を通した直接的な働きかけが発達的に大きな意味を持つものと考えられる。本事例においては，Clの母親にも毎日15分程度，家庭で動作訓練を行ってもらったが，こうした母親との直接的なふれあいも幼いClには大切な意味を持つものであったと考えられる。

当初から比べると，現在までのClの行動の変化には驚かされる。しかし，まだ現在においてもＳ児には，目が合いにくい，Thを引っ張って要求を伝える，落ち着かない，注意を十分に持続させられない等の行動も，しばしば見られる所もある。Ｓ児の模倣や表象の力がかなり伸びてきたことから，Thとしてはさらに先を伸ばす点に意識が向いていた感もあり，むしろ，対人関係の基盤である「自己－他者の関係」がまだ完全には獲得できていない点も多少残されているようにも思われる。このようなことからも，対人的な行動の基盤となる他者認知をよりしっかりと育むことの重要性と，そのためには身体を通した関わりをよりしっかりと行っていくべきことがあらためて認識されたように思われる。今後の支援においても，身体を通しじっくり他者と関わる体験を重ねていくことで，他者認知そして「自己－他者」の関係性を育むことを意識する必要があると考えている。

Ⅴ．引用文献

森﨑博志　2002　自閉症児におけるコミュニケーション行動の発達的変化と動作法　リハビリテイション心理学研究，30，65-74.

森﨑博志　2004　自閉的な子どもとの身体を介した関わりとコミュニケーション発達　日本特殊教育学会2004年大会　シンポジウム発表資料.

大神英裕　2002　共同注意行動の発達的起源　九州大学心理学研究，３，29-39.

税田慶昭　2003　乳幼児期における動作とこころの発達過程　―構造方程式モデリングによる運動・コミュニケーションの発達的連関の検討－　リハビリテーション心理学研究，31，35-46.

杉山登志郎　2001　自閉症療育の新たな課題　発達，85，2-10.

滝川一廣　2002　自閉症児の遊戯療法入門　―学生のために―　愛知教育大学　治療教育センター編.

滝川一廣　2004　「こころ」の本質とは何か　－統合失調症・自閉症・不登校のふしぎ－　筑摩書房，111-182.